

分科会	中3公民	郡市名	岡崎
提案者	岡崎市立葵中学校		小久江友見

研究題目

仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業
～「地方自治と私たち」の実践を通して～

1 はじめに

岡崎市の社会科部は、研究テーマ「仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」を受け、昨年度から授業実践を行ってきた。昨年度の研究を通して得られた成果と課題は以下の通りである。

<p><実践単元> 2年生 地理的分野「中部地方—伝統産業は存続していくことができるのか—」</p> <p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・二度のかかわり合いの場を設定し、一度目のかかわり合いでは個人追究の視点を明らかにすることができた。二度目のかかわり合いでは、学級の仲間の意見を聞いて、自らの考えをより深めたり、新たな視点にも目を向けたりすることができた。 ・地域教材を取り上げたことで、身近な問題として捉え、学校内外の仲間と共に意欲的に追究活動に取り組むことができた。その結果、伝統産業を取り巻く問題について自分事として考えられるようになった。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの意識が連続するように単元構成を組んだが、学ばせたいという思いから、教師側の誘導が強くなってしまった場面があった。主体的な社会参画への意欲を高めるために、思考の連続性を大切にしたい単元構成の在り方を再考する必要がある。

これを受けて、本研究では、仲間とかかわりを授業の核に据えながら、子どもの切実な問題意識から、追究意欲を高めることで、よりよい社会参画をめざすことができるようになることを目指し、新しいテーマのもとで研究を進めることとした。

2 研究主題のとらえ

<p>「仲間とかかわりながら」</p> <p>「仲間」とは、共に学び合う学級の子どもたちだけでなく、学びを通してかかわる人たちもすべて含めたものを意味する。よりよい社会づくりへの参画のためには、仲間とかかわり合うことが礎となるべきであると考えます。</p> <p>「よりよい社会づくり」</p> <p>「よりよい社会」とは、そこにかかわる人にとって幸せを感じられる社会（持続可能な社会）である。問題の解決が見えた先にあるのが「よりよい社会」であると考えます。</p> <p>「参画をめざす」</p> <p>「よりよい社会づくり」へ「参画する」という行動化だけをめざすのではなく、行動化への意識や意欲を高めたり、きっかけを作ったりする「参画していこうとする」姿や、社会とかかわりに「思いをはせる」姿もめざす。</p>

3 本研究実践を通して目指す子ども像は以下のとおりである。

<p>① 社会的事象に対する切実感をもち、その問題解決のための追究活動において仲間と積極的にかかわり合い、主体的に学ぼうとする生徒</p> <p>② 情報を批判的に捉え、自分の考えを再構築していく中で、多面的・多角的に物事を考え、価値認識を深めることができる生徒</p> <p>③ 仲間とかかわり合いを通して、よりよい社会づくりへの参画の意欲を高める生徒</p>

4 研究の仮説と手立て

<p>【仮説Ⅰ】 子どもたちにとって身近な事象を教材として取り上げれば、追究意欲を高め、仲間と積極的にかかわろうとするであろう。</p>
<p>手立て① 伊賀川という地域教材を取り上げる・・・社会的事象の課題を自分事としてとらえ、切実感をもって追究活動を行うことができるようにする。</p> <p>手立て② 単元計画を柔軟に構成していく・・・子ども自身の計画や、思考の変容に合わせてゲストティーチャーや資料追究の時間を柔軟に変更し、かかわり合いへの意欲を高める。</p>
<p>【仮説Ⅱ】 子どもたちが必要とする仲間とのかかわり合いの場を単元上に配置すれば、追究活動に主体的に参加し、よりよい社会づくりへの参画をめざす態度を養うことができるであろう。</p>
<p>手立て③ 子どもと子どものかかわり合い・・・現在の伊賀川の姿が住民の求めている姿であるかを議論することで、多面的・多角的な視点があることに気付くことができるようにする。授業日記を書く際に、「誰のどんな意見で自分の考えが変わったか」を記すようにする。</p> <p>手立て④ 子どもと教師のかかわり合い・・・子ども同士のかかわり合いや、地域住民とのかかわり合いを子どもの意識に沿ってコーディネートすることで、追究活動への意欲を高められるようにする。また、子どもの思考に揺さぶりをかけたり、つまづきを助ける朱書きを行う。</p> <p>手立て⑤ 子どもと地域住民のかかわり合い・・・伊賀川にそれぞれ違った立場からかかわっている地域住民への聞き取り調査をすることで、身近な大人が自分たちの力で伊賀川とよりよい形で共生しようと努力していることに気付き、よりよい社会づくりへの参画に意欲を高められるようにする。</p>

5 教材について

本研究では、学区を流れる「伊賀川」を教材として取り上げた。伊賀川は、桜の名所として有名で、その景観が広く市民に親しまれてきた川である。しかし、過去には氾濫を繰り返し、浅井浅次郎によって改修工事が行われたという歴史もある。このことは小学校の郷土読本で取り上げられており、小学生の段階で伊賀川の改修について学習している。なだらかな土手を下り、川へ入って遊んだという経験を懐かしむ大人もいる。このように、多くの市民に親しまれてきた伊賀川だが、平成20年8月末に岡崎市を襲った集中豪雨では堤防が決壊し、甚大な被害をもたらした。床下・床上浸水のみならず、2名の犠牲者が出るほどの被害であった。このことから、行政は治水へと動き、国から床上浸水対策特別緊急事業として約60億円の補助を受けて、河川改修工事を行うこととなった。その結果、伊賀川の安全性は確保されたが、川幅を広げるために桜の木が伐採され、土手はコンクリートで固められ急斜面になり、川へ入ることもできなくなった。この工事に関しては地域住民がさまざまな角度から行政へ働きかけ、その思いを実現したという事実がある。一つ目は、川の沿線に住む住民が、人命を守るために河川改修工事を行政に訴え、実現させたことである。二つ目は、桜の木をできる限り保存するよう署名を集めたことにより、伐採をする桜の木を最小限に抑えることができたことである。このように、伊賀川はさまざまな角度から地域住民がかかわり、行政との連携を図りながら、景観と安全性を確保してきた川であり、多面的・多角的な視点から社会的事象について思考するのに適した教材であると考えた。さらに、地域住民の伊賀川への愛着を多様な形で表す姿から、社会参画の在り方を直接学ぶことができ、よりよい社会づくりへの参画の意欲を高めることができると考えた。また、本校では、開校当初から伊賀川に関わる活動が70年以上続けられており、生徒たちも実際に伊賀川へ足を運び、土手に花の球根を植える活動を行っている。生徒にとっても比較的身近な社会的事象であることから、その河川改修工事は是非について切実感をもって追究活動を行えるのではないかと考え、「伊賀川」を教材化するに至った。

6 単元目標

- (1) 伊賀川について地域住民の一人として関心を持ち、伊賀川の景観や桜の保全を願う地域住民の思いと、防災対策として行われた河川改修工事について関心を持ち、これからの水害対策について意欲的に追究することができる。 (関心・意欲・態度)
- (2) 伊賀川河川改修工事の追究を通して、地方自治としての公助・共助・自助に自分がどのように参画できるかを考えることができる。 (思考・判断・表現)
- (3) 伊賀川河川改修工事や、水害に対する備えと地域住民の思いについて、適切な手段を選択して調査することができる。 (資料活用能力)
- (4) 伊賀川河川改修工事に対する地域住民の取り組みが行政を動かしたという事実から、地方自治が住民参加による住民自治に基づくものであることを理解することができる。 (知識・理解)

7 単元計画 (時間の()つき数字は当初計画より実際に増えた時間数である)

学習課題	時間	学習内容	関連する手立て
伊賀川の河川改修工事が行われたのはなぜだろう	1	<ul style="list-style-type: none"> ・改修工事前の伊賀川の様子を知る。 ・現在(改修工事後)の伊賀川の様子を知る。 ・工事の前後のどちらの伊賀川が魅力的かを話し合う。 ・伊賀川の河川改修工事が行われた経緯について知る。 	手立て①
昔の良さを残すような工事はできた?できなかった?話し合ってみたいな。			
現在の伊賀川は住民が求めている姿だろうか(1)	1	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の伊賀川は住民が求めている姿かどうか話し合う。 ・追究の視点を定める 	手立て③ 手立て④
実際に地域の方々はどう思っているのだろうか。聞いてみたいな。			
地域の方は伊賀川にどんな思いをもっているのだろうか	3 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・追究計画を立てる。 ・ゲストティーチャーにインタビューをする。 ・アンケートを作成する。 ・資料追究を行う。 	手立て② 手立て④ 手立て⑤
地域の方々はいろんな思いをもっていることが分かった。もう一度みんなと話し合ってみたいな。			
現在の伊賀川は住民が求めている姿だろうか(2)	2	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の伊賀川が住民の求めている姿かどうか2回目の話し合いをする。 ・対立から合意、参画への思考を深める。 	手立て③ 手立て④
安心安全と景観の両立は簡単なことではないが、地域の方も行政と連携を取りながら、その両立を目指して努力してきたんだな。私たちにもできることはあるのかな。			
これからの伊賀川と私たちについて考えよう	1	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の伊賀川とどう関わっていくかを考える。 ・水害から身を守る方法について考える。 	手立て④
地域住民の一人として、自分にできる形で伊賀川にかかわっていきたい。そのためには、水害に対する自助や共助の備えをすることも必要だな。			

8 抽出生徒

- A**・・・学習に対する態度は非常にまじめでこつこつと取り組むことができる。しかし、理解に時間がかかり、あいまいな事実認識のまま、なんとなく自分の考えを構築してしまうため、自分の考えに自信をもつことができない。伊賀川に比較的近い地域に住んでおり、幼少期には伊賀川で遊んだ思い出がある。仲間とのかかわりの中で、確かな事実認識を得ることで、自信をもって自分の考えを表現することができるようにしたい。
- B**・・・自分の考えをはっきりと伝えることができる。一方で他者の意見を受容しようとする姿はあまり見られない。伊賀川からは離れた地域に住んでいる。仲間とのかかわり合いの中で、少しでも他者の意見を受容した上で自分の考えを再構築することができるようにしたい。

9 授業実践

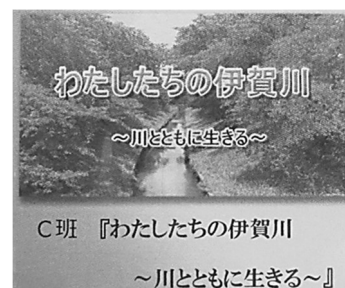
(1) 伊賀川への思いを高める生徒（第1時から第2時）

第1時ではまず、現在の伊賀川と、河川改修工事をする以前の伊賀川の写真(資料1)を提示した。【手立て①】写真を見比べる中で、「昔の方がいい」「自分も遊んでみたかった」「桜がきれい」といったつぶやきが多く出された。そこで、現在の伊賀川と工事をする以前の伊賀川では、どちらが魅力的かを問いかけた。ほとんどの生徒が、以前の伊賀川の方が魅力的であると発言した。その理由は、「流れのそばまで行くことができた」「多くの人々が接し愛されていると思う」「公園のよう



資料1 第1時で提示した伊賀川の写真

で身近に感じられる」「満開の桜がきれい」「自然豊かなところがいい」といった親しみを込めたものであった。一方で、少数ではあったが、現在の伊賀川の方が魅力的であるという意見もあった。その理由は、「整備されてきれいになっている」「川が深くなっているから決壊しにくい」というものであった。その中で「決壊」や「整備」といった安全に関わる言葉が生徒からつぶやかれ、安全性に生徒の意識が向き始めたため、岡崎市自作視聴覚教材「わたしたちの伊賀川～川とともに生きる～」を視聴した(資料2)。これにより、昔のことが想起され、平成20年8月末に岡崎市で集中豪雨があったこと、伊賀川の堤防が決壊し2名の犠牲者が出るなど学区で大きな被害があったことをきっかけに河川改修工事が行われたという事実を認識した。映像から伝わる水害の恐ろしさに、安全性の必要性を感じた生徒も少なくないようだった。その中で、「でも、現在の伊賀川は住民の求めている姿なのかなあ」というつぶやきが出されたことから、第2時で話し合いをすることとした。【手立て③】



資料2 岡崎市自作視聴覚教材

感想①のように、抽出生徒Aは、工事の必要性に理解を示しつつ、多くの桜の木が伐採されてしまったことに関して残念に思う気持ちを表現している。一方で、抽出生徒Bは、集中豪雨で死者が出たことを「悲しいこと」とし、安全性の高まった現在の伊賀川の方が魅力的だと記述している。

感想①第1時の抽出生徒Aの感想

できれば昔の伊賀川のままがよかったけど、氾濫して被害が大きく二人の命が奪われてしまったのなら仕方ないと思う。桜が少なく寂しい感じだけど川が深くなり安全になって良かった。もう少し桜の木を残してくれれば良かったのに・・・

感想②第1時の抽出生徒Bの感想

整備をして川がきれいになったから、今の方が魅力的だと思う。悲しいことがあったから、伊賀川の外観を捨てる決心がみんなですできたと思った。

第2時では、まず抽出生徒Aの感想を取り上げた。すると「安全面」と「愛着」という二点に迷う生徒の姿が見られたため、「現在の伊賀川は住民の求めている姿だろうか」というテーマで話し合いを行った(資料3)。「求めている姿である」という意見のC1・C2・C3から「集中豪雨」や「対策」という言葉が出された。続けて「求めている姿でない」という意見のC4・C5・C6は、「桜の木」「川で遊ぶ」「愛着」といった言葉が出され、真っ向から意見が対立した。「求めている姿である」という意見の生徒たちは、集中豪雨で大きな被害にあったことから「安全性」を重視していた。それに対して、「求めている姿でない」という意見の生徒の中には、自身が幼少期に伊賀川で遊んでいたという生徒が

おり、その当時のことを想起し、強く意見を主張していた。その後もそれぞれに自分の思いによる話し合いが続いたが、C10の「もしも亡くなったのが自分の身内だったら昔の方が良かったとは言っていないと思う」という抽出生徒Bの発言により、「住民の立場」という視点に生徒の意識が向かった。その後、抽出生徒Bの発言から考えを受容させた「揺らぎ」が見られた。C12が「その人の立場によって意見が変わるのではないかと」発言をしたため、教師が「本当にそうなのかなあ」と問いかけた。すると生徒が沈黙した。そこで「どうする？」と問いかけると、「調べてみたい」という反応があり、次時から追究活動をしていくことにした。

この時間の感想から、抽出生徒Aは「安全性」よりも「愛着」を重視していたことが分かる。しかし、「安全性」という視点を意識し、聞いてみたいという記述があることから、追究への意欲の高まりを読み取ることができる。抽出生徒Bは、「亡くなった方の家族という立場」という視点で考えている。この生徒Bの発言が級友の思考に揺さぶりをかけ、実際の住民の思いを知りたいという意欲へとつながった。これらのことから【手立て③】は有効であった。

感想③第2時の抽出生徒Aの感想【求めていた姿でない】
 …自分はやっぱり昔の伊賀川が好きでした。自分は毎日のように伊賀川で遊んでいた思い出があり、地域の小さい子がすごく悲しがっていた声を聞いたことがありました。…伊賀川で遊べれば生き物をとったり、地域の方とふれ合ったりできたと思う。…安全性でいったら絶対に今の方がいい。でも、桜の木をあんなに切る必要があったのか、本当に聞きたい。寂しすぎる。

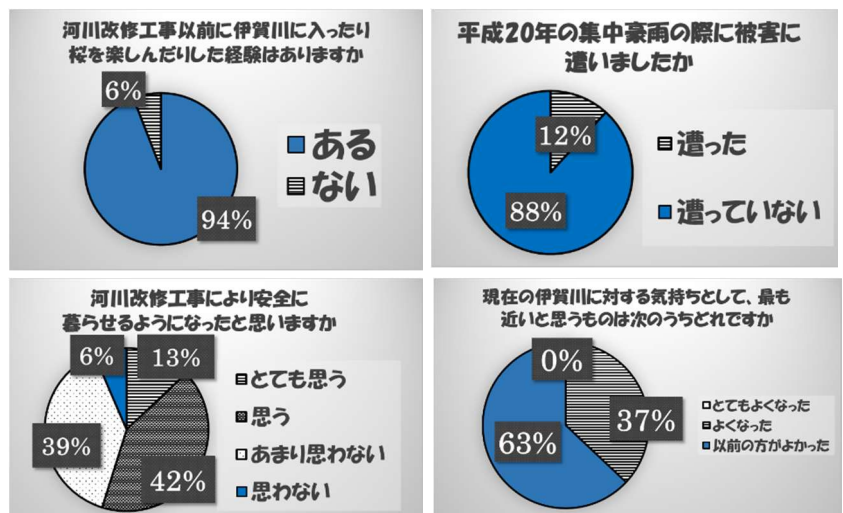
感想④第2時の抽出生徒Bの感想【求めていた姿でない】
 仮に二人亡くなったうちの一人が自分の家族だとすると、安全な状態にするべきだと思うのに、変えないとなると怒れるはず。だから、住民が安全を求めている姿だと思った。伊賀川の氾濫を止めることができるように作り直し、正解だと自分は思った。

T	現在の伊賀川は住民の求めていた姿であると言えるでしょうか。
C1	求めていた姿だと思います。集中豪雨で大きな被害があったので、安全性は大事だと思うからです。
C2	私も求めていた姿だと思います。見た目は昔の方が良かったと思うけれど、今の方が安全だからです。
C3	僕も求めていた姿であると思います。集中豪雨によって大きな被害が出ていたり、2名も亡くなったりしている以上、対策をしないわけにはいかなかったと思うからです。
C4	僕は求めていた姿ではないと思います。今も桜はあるけど、昔の川を包み込むような大きな桜があったからです。
C5	僕も求めていた姿ではないと思います。安全性は確かに大切だと思うけど、何でもかんでも工事をすればいいというわけではないと思います。子どもが遊べるような場所も残すべきだと思います。
C6	僕も同じです。自分が川で遊んで楽しかったから、今の子どもたちにも経験してほしいと思います。
C7	僕は求めていた姿であると思います。今も桜は一応あるし、今の子どもは川で遊ぶこともないと思います。
C8	僕は求めていた姿でないと思います。今は冷たいコンクリートに囲まれていて昔のような愛着がわかないと思うからです。 (中略)
C9	私は求めていた姿だと思います。工事をして昔より安心して暮らせるようになったと思うからです。
C10	僕も求めていた姿だと思います。もしも、亡くなったのが自分の身内だったら、昔の方が良かったとは言っていないと思うからです。(生徒B)
C11	私は、どちらとも言えません。安全性は大切だとおもうけれど、工事をして本当に安全になったのかも疑問だからです。
C12	ぼくは、その人の立場によって意見が変わるのではないかと思います。川の近くに住んでいる人にとっては「求めていた姿」かもしれないけれど、川から離れたところに住んでいる人にとっては「求めていた姿ではない」のかなと思います。
T	なるほど。でも、本当にそうなのかなあ。
C	……………(沈黙)
T	どうする？
C13	実際にどう思っているのか聞いてみたいです。

資料3 第2時の授業記録

(2) 伊賀川に対する住民の思いを追究する生徒
 (第3時から第6時)

前時に地域住民がどう思っているのかを調べてみたいという生徒の思いがつぶやかれたため、第3時と第4時に追究活動の計画を立てることにした。「どんな方法で調べたらよいだろう」との教師の問いかけに、「手紙」「アンケート」「インタビュー」「学校に招待する」という意見が出された。そこで、次に「どんな人に協力してもらおうとよいだろう」と問いかけた。その結果、「伊賀川の近くに住む人」「伊賀



資料4 アンケート調査の結果

川から少し離れたところに住む人」「伊賀川を知っている人」「伊賀川を美しくする会の人」「遺族」「保護者」「工事にかかわった人」という意見が出された。これらを総合して、「アンケート調査」と「インタビュー」を実際に行うこととなった。アンケート調査は、本校の保護者に協力していただくことにした。質問項目を話し合い、アンケートを作成した（資料4）。第4時は、インタビューに協力をいただく3名について知らせた後、それぞれの方への質問内容を個々で考えた。第5時から第6時は伊賀八幡宮でインタビューを行った。当初の予定では、ゲストティーチャーとして教室へ招くことを予定していたが、「現在の伊賀川をもう一度ちゃんと見てみたい」という生徒の思いが出されたため、実際に伊賀川沿いを歩いて伊賀八幡宮へと向かうことにした【手立て②】。道中に生徒からは、「桜の木は全然ないね」「深くて入るのは無理だね」という声が聞こえた。さらに道中で3人にインタビューを行い、生徒の思考が安全性重視の方向へ変容していく様子が見られた（資料5）。

	人物概要	お話しの内容	感想
被災経験のある方	<ul style="list-style-type: none"> 集中豪雨で浸水の被害に遭い隣家の方が亡くなっている 被災した経験から、行政に対して防災に関する様々な要望を出すなど、安全性について強く訴えてきた 	<ul style="list-style-type: none"> 集中豪雨で多い所では2m90cmの浸水が起こった（1時間に153mmの降水） 119番通報をしても繋がらず、救急車が到着したのは3時間後 全てが泥だらけになった。アルバムも流されてしまい、思い出も全て流されてしまった 現在の伊賀川は安全性が高まり、安心して暮らせているが、いざというときのための備えが大切 伊賀川とふれ合えなくなってしまったことは寂しい 	<ul style="list-style-type: none"> 実際に伊賀川が氾濫すると、人命が奪われてしまったり、思い出も流されてしまうんだな。 その後も、泥だらけになってしまった町をきれいにするなど大変なことがたくさんあるんだな
署名活動を行った方	<ul style="list-style-type: none"> 集中豪雨で被害には遭っていない 伊賀川を美しくする会所属 河川改修工事に際して桜の木が伐採されてしまうということを新聞の報道により知り、桜の保存を訴える署名活動を行った 	<ul style="list-style-type: none"> 80年前に2600本の桜の木が植樹された 工事で桜の木が伐採されることを新聞の報道で知り、署名活動を行った。 署名活動の結果、6か月で約8000名の署名を集めることができた。 行政と18回以上の話し合いを重ね、伐採する木と残す木を1本ずつ確認した 60%以上の桜の木を残すことができた 景観が変わってしまったことは残念だが、安全に暮らせるようになったことは良かった 	<ul style="list-style-type: none"> 8000名もの人たちが伊賀川の桜を守りたいという思いをもっていたんだな 行政に働きかけて話し合いを重ねることで60%以上の桜を残すことができたのはすごいな
市議会議員の方	<ul style="list-style-type: none"> 住民と行政を結ぶ立場にあり、集中豪雨の際の行政の動きに詳しい 幼少期には伊賀川で遊んだという経験もある 	<ul style="list-style-type: none"> 住民から市へ河川改修工事の要望があり、市から県、県から国へと伝えられ、緊急対策事業として認められた 国からに岡崎市に150億円の補助が下り、そのうち60億円弱が伊賀川の改修工事に充てられた 景観が変わってしまうことは残念だが、行政は住民の安全が第一であるため、工事はしなければならなかった 	<ul style="list-style-type: none"> 河川改修工事は、住民からの要望が行政を動かしたんだ 60億円もの補助金が国から出るほど重要な工事だったのなんだ

抽出生徒Aは、このインタビューから地域住民の署名活動によって桜の木をできる限り残すことができたという事実を知ったことで、安全になった今の伊賀川が良くなったという感想があった。抽出生徒Bは、住民の要望が行政を動かし、河川改修工事の実現につながったという事実を知り、安全性を重視する自分の考えに確かな根拠をもち、より自信をもったことがうかがえる。これらのことから【手立て②⑤】は、計画を子どもの思考に合わせ学校外の仲間とかかわり合うことで、社会とかかわる姿に近づいたことから有効であった。

資料5 インタビューの内容と生徒の感想

感想⑤第3・4時の抽出生徒Aの感想【求めている姿である】

前までは絶対に昔の伊賀川がよかったけど、インタビューでお話を聞き、今の伊賀川の方がよくなりました。桜の木が少なくなったことは変わらないけれど、署名活動を行った方たちのおかげで全ての桜の木を伐採せずに済んだので感謝しています。今思うと、桜の木より人の命の方が大事だし、植え直した桜の木もいつかは大きくなります。工事したことで、今後の豪雨の被害も小さくなるし、二度と被害に遭わないために工事をしたことは良かったと思う。

感想⑥第3・4時の抽出生徒Bの感想【求めている姿である】

やはり安全第一。自然災害等でまた川の氾濫や浸水が起こると、またさらに被害者をうみ、同じことの繰り返しで、前回亡くなった二人から学ぶべきところを生かしていないし、市議会議員さんが言っていたけれど、住民が改修工事を要望したのだから、現在の伊賀川は住民の求めている姿であると思う。

(3) 現在の伊賀川を再評価する生徒（第7時・第8時）

インタビュー調査を経て事実をつかんだ生徒は、さらに資料追究をして、集中豪雨の被害について具体的な数値を資料から読み取ったり、桜の伐採が行われた箇所や植樹予定の場所を読み取ったりした。それらを踏まえて自分の考えを再構築する姿が見られた。そこでタイミングを見て再度「現在の伊賀川は住民の求めている姿だろうか」というテーマでの話し合いを行った。一度目の話し合いでは、「求めて

いた姿でない」という立場の生徒が多かったが、二度目の話し合いではその数が逆転した。以前は「求めていた姿でない」という立場であった生徒も、インタビューで、3名の誰もが「安全になってよかった」という言葉を口にしてしたこと、改修工事をしてより広く深くなった伊賀川の様子を実際に見たことで「安全性」が何よりも大切だと考えるようになっていた。一方で、「求めていた姿でない」という考えを貫いた生徒もいた。ただ、一度目の話し合いと違っているのは、自分自身の思いではなく、実際にインタビューをした3名の誰もが「現在の伊賀川の姿は寂しい」ということを口にしていたことを根拠としていたことである。このことから、どちらの立場も「住民の視点」から思考を構築することができるようになった。ただ、河川改修工事については、住民の要望を受けて行政が行った事業である。どちらの立場であってもこの事実を価値付ける必要があると感じたため、「工事は必要だったのだろうか」と問いかけ、後半の話し合いが始まった。【手立て③④】

T 4	工事は必要だったのだろうか
C 1 1	そんなに頻繁に洪水は起こらないし、家がしっかりしていれば大丈夫だから工事はしなくてよかった
C 1 2	頻繁に起きることではないかもしれないけれど、起こる前に対策をしなければいけないから、工事は必要だった
C 1 3	避難訓練などをしておけば、洪水が起こった時にも命を守ることができるから、工事をしなくても大丈夫だったと思う
C 1 4	避難訓練で命が守れると言っていたけれど、彦坂さんも言っていたけれど、失われるのは命だけではなくてアルバムなどの思い出も失われてしまう。がれきを撤去するのも大変そうだったしやっぱり工事は必要だと思う。
C 1 5	避難訓練をしていれば大丈夫と言っていたけど、訓練をしていたとしても高齢者の方は逃げられないかもしれないし、川から離れたところに住んでいる人にとってはそれで大丈夫と思うかもしれないけど、近くに住んでいる人にとっては、現在の安全性が必要だから、工事はした方がよかった。
C 1 6	工事はした方がよかったかもしれないけれど、遊歩道などを残したり、もう少し思い出も残せるような工事にすればよかったと思う。
C 1 7	さっき高齢者は逃げられないと言っていたけど、若者が助けられればいいと思うし、地域で協力すれば、工事をしなくても命も思い出も守れたんじゃないかと思う。
C 1 8	地域の協力などで両方を守ることもできるかもしれないけれど、人の命を守るためには、最悪を想定していないといけないと思う。だから、この工事は必要だった。 (中略)
C 1 9	インタビューをしたときに被災経験がある方が言っていたけど、そもそもこの工事は集中豪雨が起きた時に、住民がやってほしいといっている工事だから・・・(生徒B)
T 5	確かに言っていたね。
C 2 0	工事をすることになったのは、集中豪雨のときに、住民の方たちが命か思い出か考えて、命を選んだから。だから、この工事は必要だった。
C 2 1	その当時のことはよく知らないけど、アンケートで「昔の方がよかった」という人がたくさんいたし、工事はしない方がよかったのかと思ったんだけど・・・
C 2 2	桜とか、生き物とかは目に見えるものだから、変わってしまったことが分かりやすく、残念に思ってしまう人が多いと思う。でも、安全になったことは目に見えるものでもないし、そこまでの豪雨が頻繁に起こるわけではないから実感しにくいところがあると思う。だから、川にそんなに近くない人にとっては、昔の姿の方がよかったと思う人も多いと思う。
C 2 3	工事をすることで、洪水などの被害もほぼ0になったと言っていたから、やっぱり工事は必要だったと思います。
C 2 4	いろんな思いがあるけれど、人命を守るためには工事したことは仕方なかった
T 6	なるほどね。地域の人々を守るために工事することは仕方なかったんだね。でも、地域の人たちは、「仕方ない」という残念な気持ちしか持っていないのかな。
C 2 5	今の伊賀川をもっと美しくしていこうと伊賀川を美しくする会の人たちが頑張っているから、残念な気持ちだけではないと思う。

すると、「求めていた姿でない」という立場であるC 1 1・C 1 3が
資料6 第8時の授業記録(後半部分)
「そんなに頻繁に洪水は起こらない」「避難訓練をすれば命は守れる」という理由から「工事は必要ない」と発言した。それに対しC 1 5が「避難訓練だけでは安全と言い切れない」という理由で「工事は必要である」と反論した。議論が続く中で、C 1 9(抽出生徒B)が「集中豪雨のときに住民がやってほしいといっている工事だから」と、地方自治において住民からの請願や陳情、多数決の原理によって行政が動くということに迫る発言をした。C 2 0も「住民が命を選んだから」と多数の意見が治水対策とする発言が続いた。それに対してC 2 2が「生き物や桜は目に見えるが、安全は目に見えず実感がしにくい。だから昔の姿の方が良かったという人も多いと思う。」と、残念だという少数派の思いに寄り添う発言をした。それを受け、C 2 4が「人命を守るために工事したことは仕方なかった」と河川改修工事を肯定する発言をした。そこで、「地域の人たちは仕方ないという残念な気持ちしか持っていないのかな。」と問いかけると、C 2 5から「今の伊賀川をもっと美しくしていこうと努力している人たちがいるから、残念という気持ちだけではない。」という努力する人々の存在に光を当てる発言があった。このように、かかわり合いによって、教室内に多面的・多角的な住民の姿を捉える生徒の姿が膨らんだことから、【手立て③④】が有効に働いたことを実証することができた。この

思いを大切にしながら、最後に次時で「これからの伊賀川と私たち」について考えることとした。

(4) 伊賀川の未来について考える生徒(第9時)

第9時にはこれまでの学習を踏まえて、これからの伊賀川について考えた。学区の大人が努力を重ね、現在の伊賀川が存在していることを学習したことで、「同じ地域の住民として、自分にできる形で伊賀川と関わっていききたい」という思いをもった生徒が多くいた。抽出生徒Aのまとめには、感想⑦のように書かれていた。以前は過去の思い出に固執した考えに終始していたAだが、この学習でさまざまに仲間と関わったことで、現在の状況が生まれた経緯を正しく理解したうえで、これからの伊賀川や自分の在り方について「それをこえるような伊賀川を地域でつくる」という言葉で自信をもって思考することができるようになっていることが分かる。また抽出生徒Bのまとめは感想⑧のように書かれていた。安全を第一に考える姿は単元を通して一貫しているが、その中に「清掃のボランティアなどを続けて、川をきれいにしていきたい」という記述がある。これは、この単元を通して級友や地域住民とかかわり続け、伊賀川への愛着や思いという側面を受容したことで見られた変化である。

感想⑦第9時の抽出生徒Aのまとめ

前の伊賀川の方が魅力的だと思っているなら、それをこえるような伊賀川を地域でつくってあげたいと思う。新しい桜の木を植えたり、周りに花を植えたり、地域の方と交流できる行事を設けたりしていくのもいいと思う。安全面では、川の氾濫を見据えた避難訓練もあまりやることがないし、氾濫したときの対策があまりできていない家が多くあると思うから、もう少し備えをしっかりとしないといけないと思う。

感想⑧第9時の抽出生徒Bのまとめ

避難訓練も良いと思ったが、話し合いをしていく中で、やはり安全第一で改修工事をして正解だと改めて思った。現在の伊賀川をより良くするために、清掃のボランティアなどを続けて、川をきれいにしていきたいと思う。

10 成果と課題

【仮説Ⅰ】について

手立て①では伊賀川という身近な教材を取り上げたことで未知と既知の事実に気付き、調べてみたいと生徒が課題に対して切実感をもつことができた。そのことが原動力となり、積極的に話し合いに参加する姿や、追究活動に取り組む姿が見られた。手立て②では計画を柔軟に変更したことで、出たい場面、場所で適切なゲストティーチャーに出会うことができ、意欲を高めることにつながった。また、実際に伊賀川の様子を見ることで、その広さや深さなど、安全性について具体的な事実を捉え、思考の再構築における深化につなげることができた。

【仮説Ⅱ】について

手立て③では一度目の話し合いで自由に意見を交わしていく中で、「その人の立場によって意見が変わるのではないかな」という新たな問が生まれ、それを解決するために追究活動に意欲的に取り組む姿が見られた。また、二度目の話し合いにおいて、友達の意見を聞く中で納得しながら思考を再構築する姿も見られた。手立て④では話し合いの場面で、状況に応じた切り返しをすることで生徒同士の意見や生徒の意識を繋げることができた。しかし、2回目の話し合いにおいて話し合いの焦点化がもう少し早い段階でできていれば、住民の参画論について迫ることができたと考えられる。手立て⑤では実際に伊賀川について尽力する3名の方と直にふれ合うことで、その生き様を肌で感じ、これからの社会の中で前向きに生きようとする姿が見られるようになった。

11 おわりに

本実践を通して、生徒は地域の問題に切実感を抱き、主体的に追究活動に取り組んだ。その中で、級友や地域住民とかかわり、思考を深めていくことができたことが成果として挙げられる。しかし、地域住民の参画論については、多数決と少数意見の尊重を手掛かりにしてもう少し本質に迫ることができれば、さらに生徒の地方自治への理解や参画への思いを深めることができたと考えられる。話し合いの中での焦点化を促すための教師の出や議論における第2課題の設定について、今後さらに研究していきたい。